夏目義孝

梅十編

梅我編

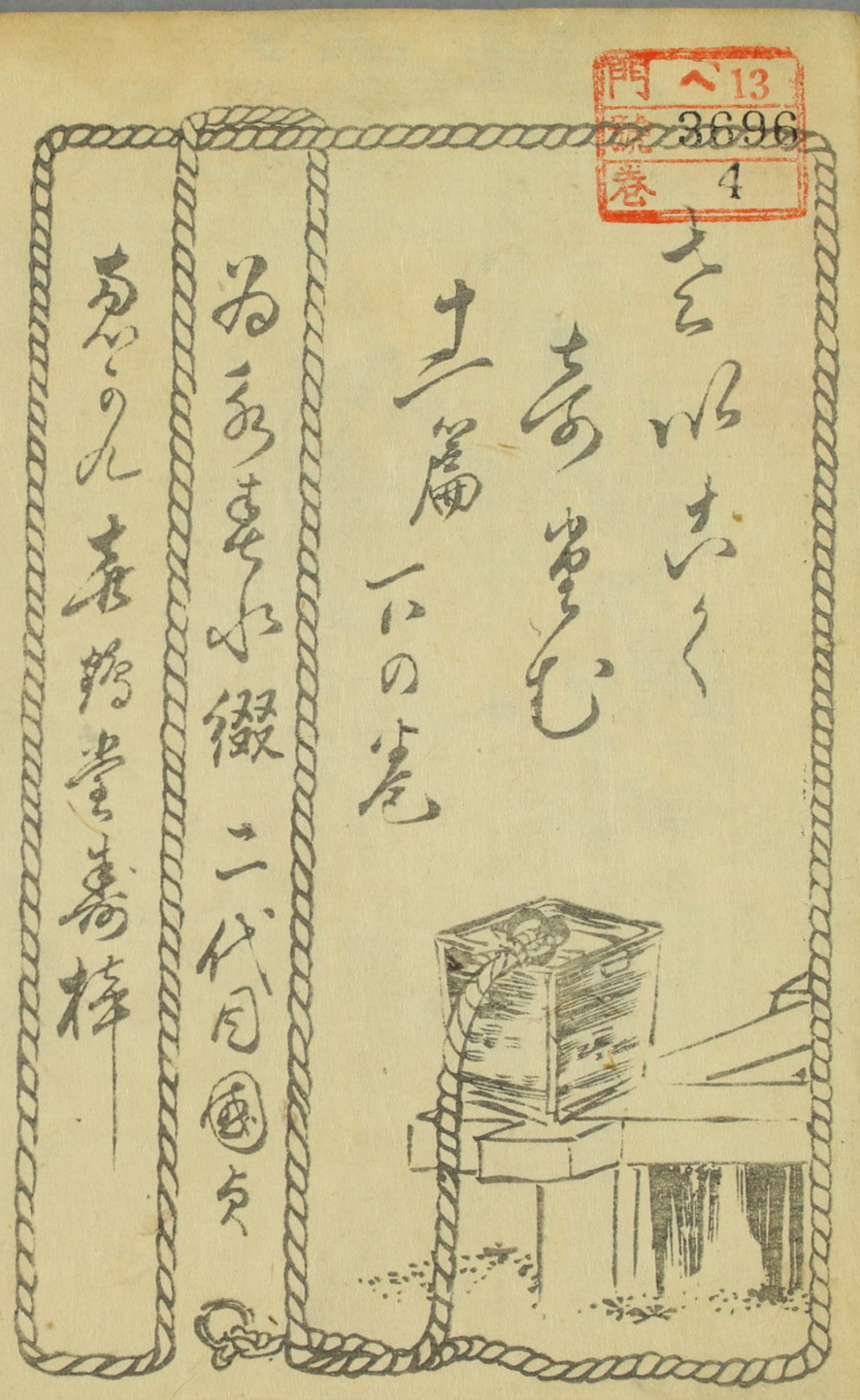
へ13
3696
4

西國奇談十編
梅蝶樓國貞画
上
下
喜雀堂板

西國奇談十二編
馬琴春水著作
一壽齋國貞画
上類世界
下
喜鶴堂
販

爲永春水作
西國奇談十二編
作豊國画
上
梅蝶樓國貞画
佐野喜板
下

門へ13
3696
巻 4



一

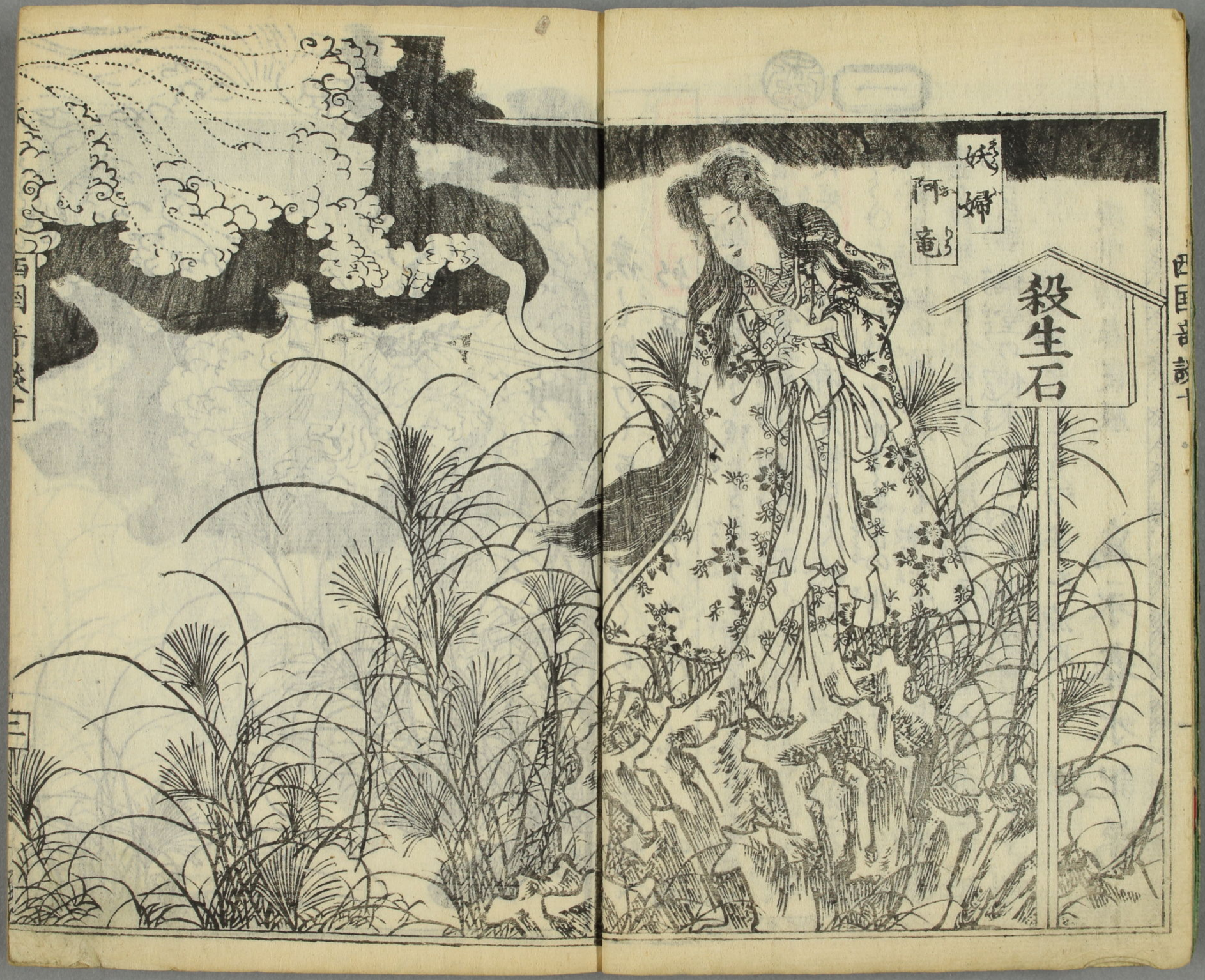
東京都立中央図書館蔵

疾も明けて暑氣はなくらうの為ふ物なく
爽やかなる青の空のうけんの水　山陽

恁く短冊ふ書るとて送る友人より贈らるゝ一ふ這へる紀僕が
警めあり常ふ座右の屏風ふ張るく年許ふらも詠むまで。
夜延の油盞る頃迄ハ寝ざる敏起てと思ふて寝ざる宵へ
ちくるゝど枕加減のよ紀まるふ雀の餌ふ集り鳴くも。
隣家ふ朝飯の跡洗ふ音も現心ふ聴ふ紀ばる晩も朝顔の
盛り紀知らぬ小紀けうと紀物申の声ふ脳うも潰して起
出ふ紀喜鶴堂の使来りく偖十編ハ奈何と言つゝまぐ覚
やゝ紀已の時の眼をとまりつて筆を深ぬ。

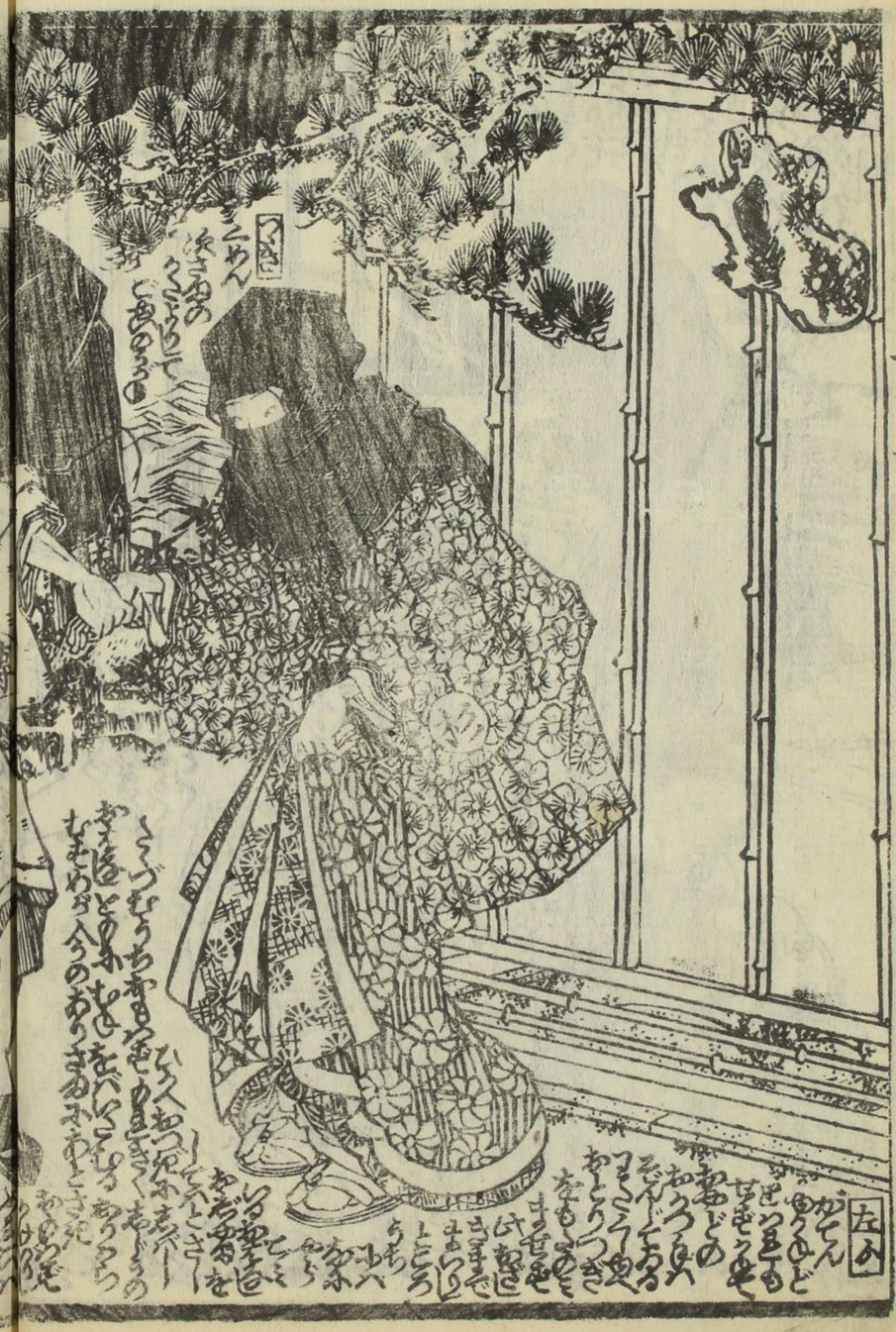
庚申初春良辰

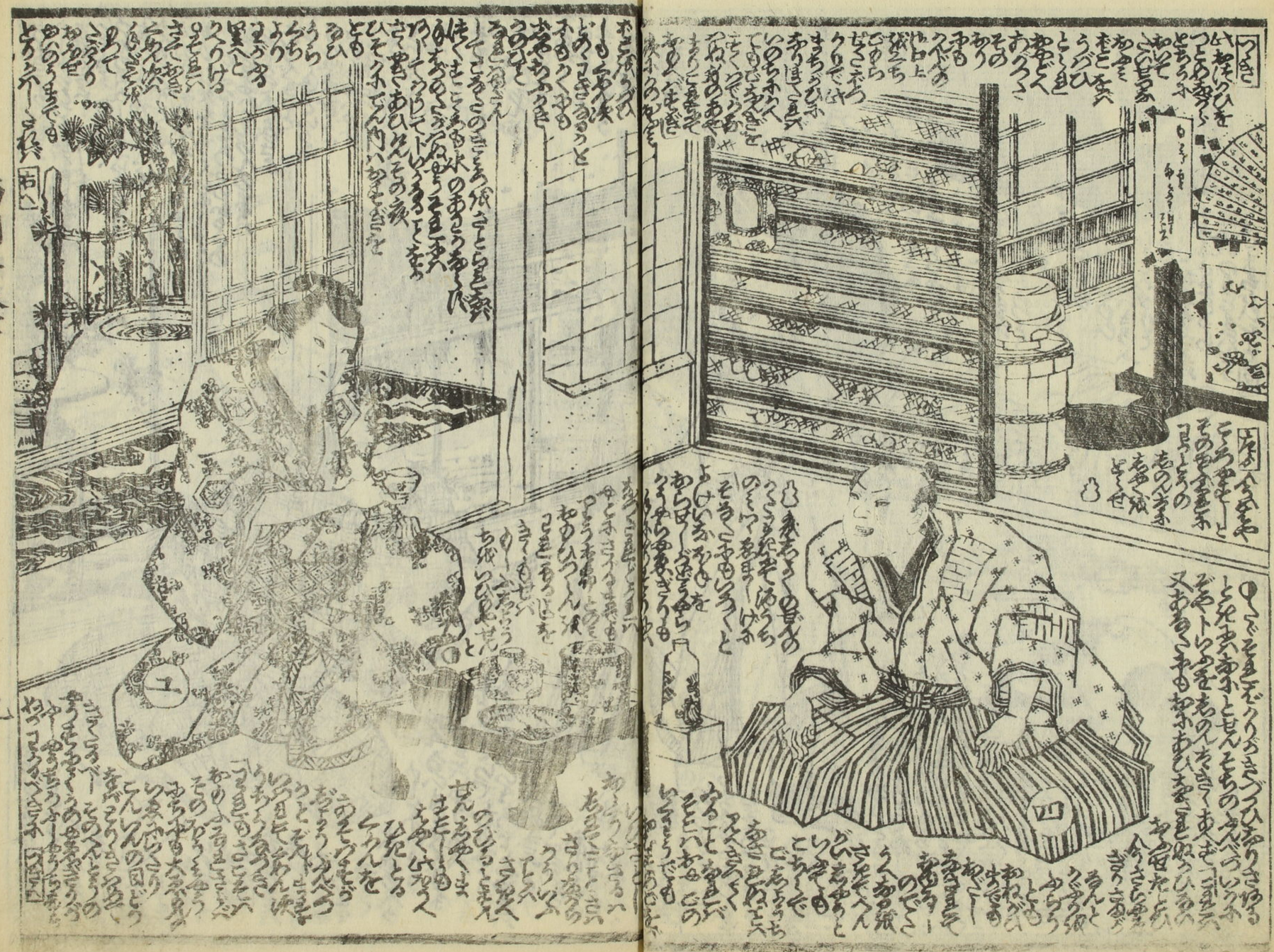
為永春水記


妖婦
阿竜
殺生石
四国奇談十
西国奇談十
二

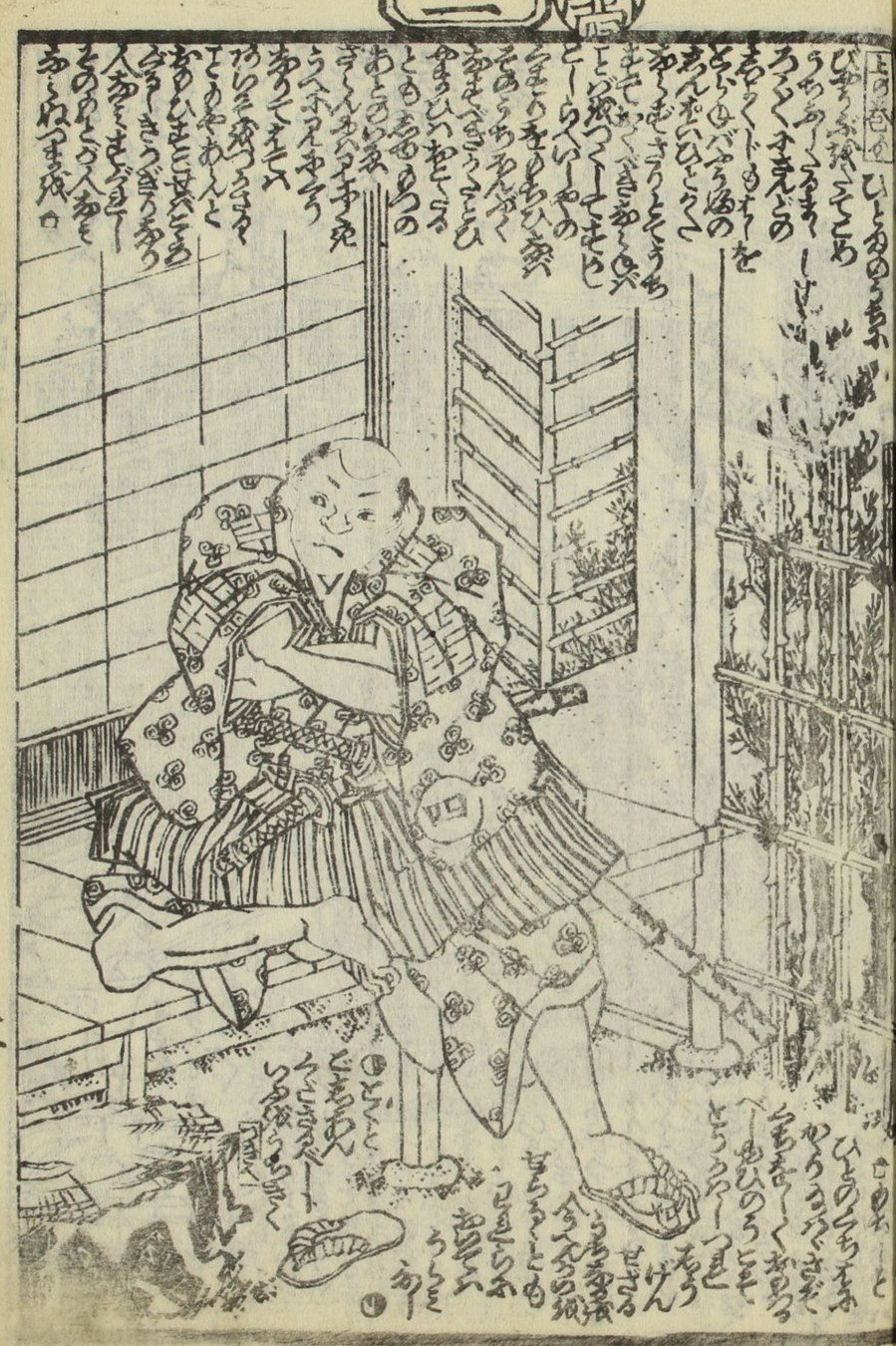
木村
龍太郎

二
一の巻
三の巻
傳
大
童

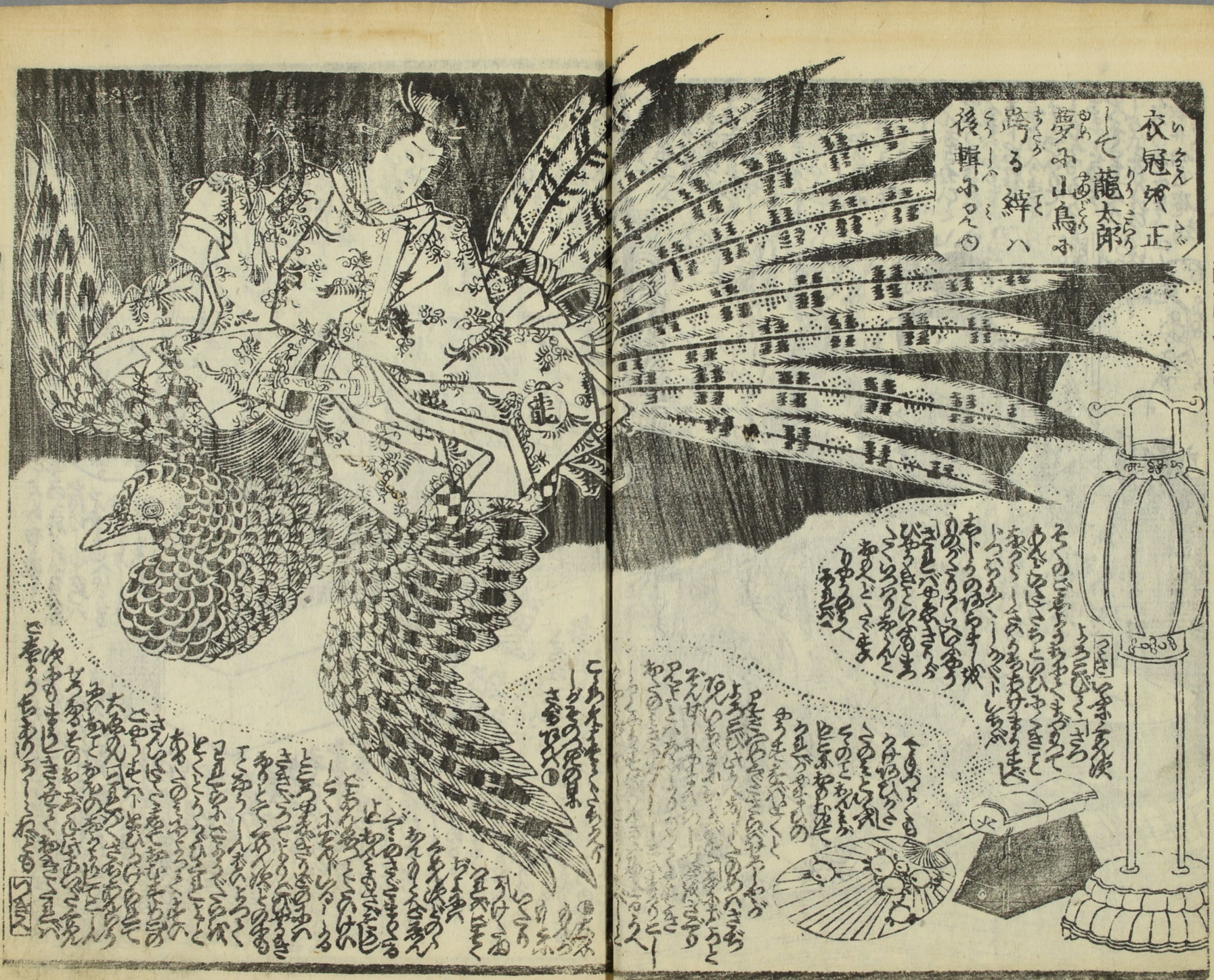


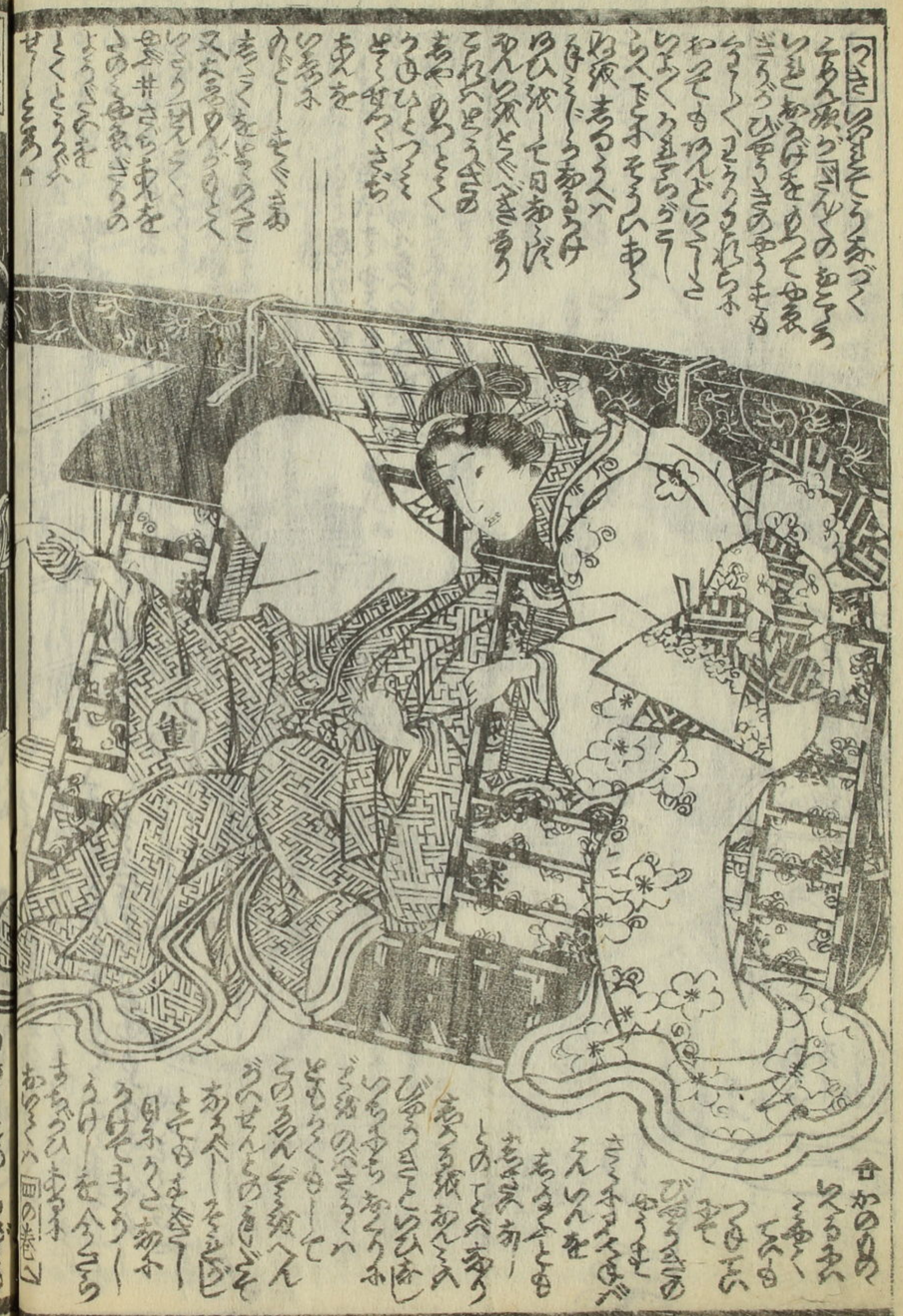


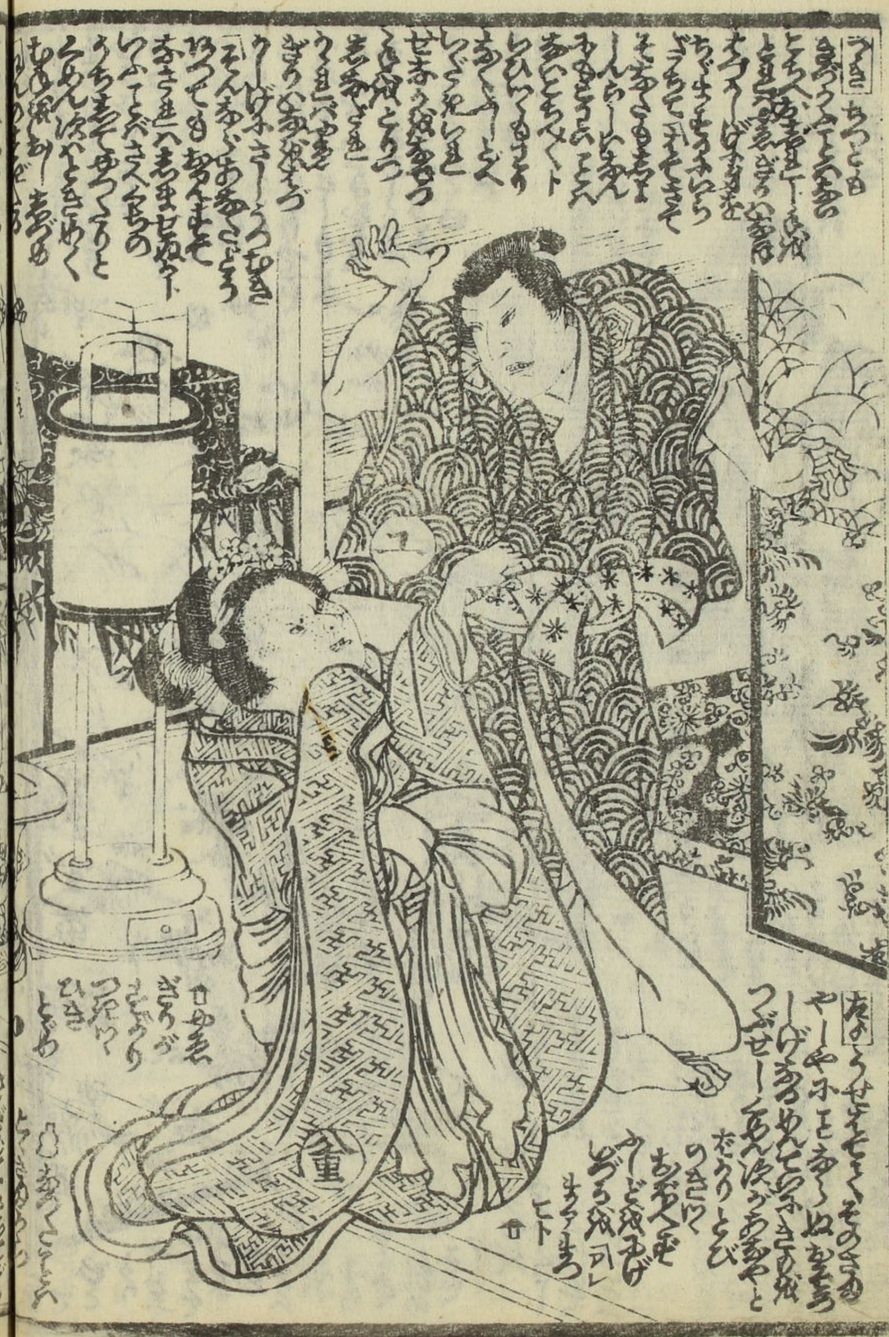
久布ぢ
春
水
雨

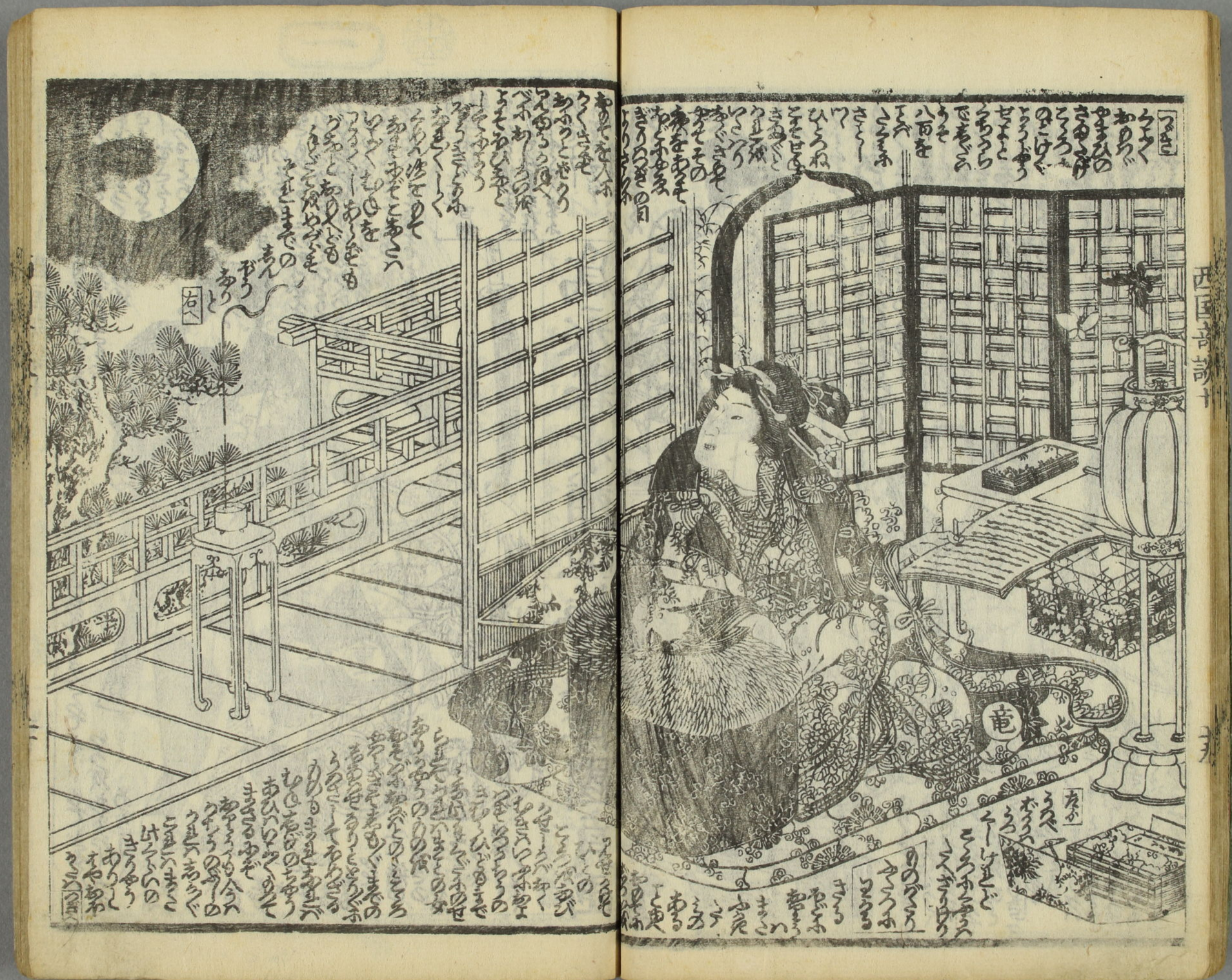


六
七


衣冠束正して龍太郎
夢ふ山鳥ふ
跨る綽ハ
後輯ふ
火



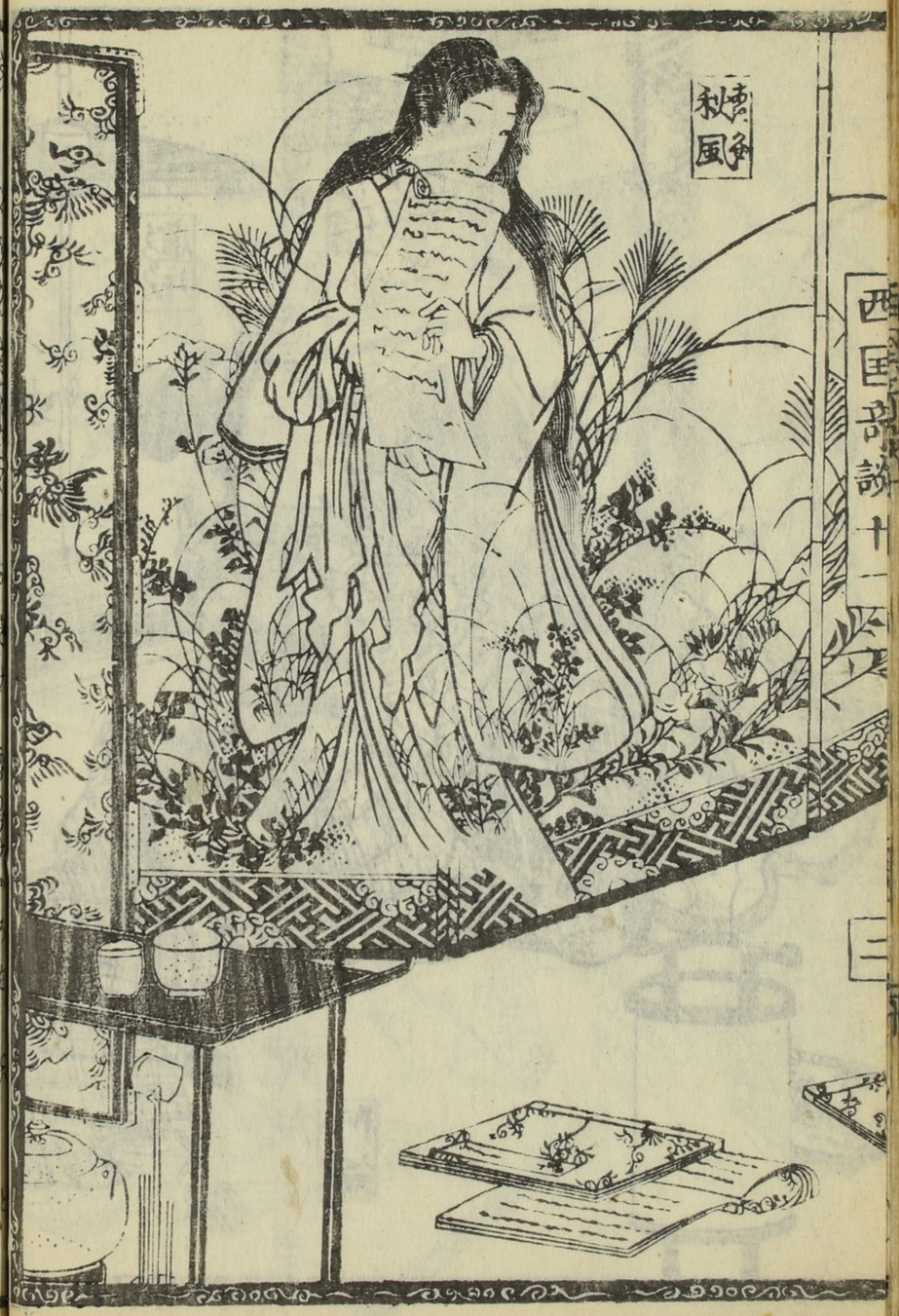



竜

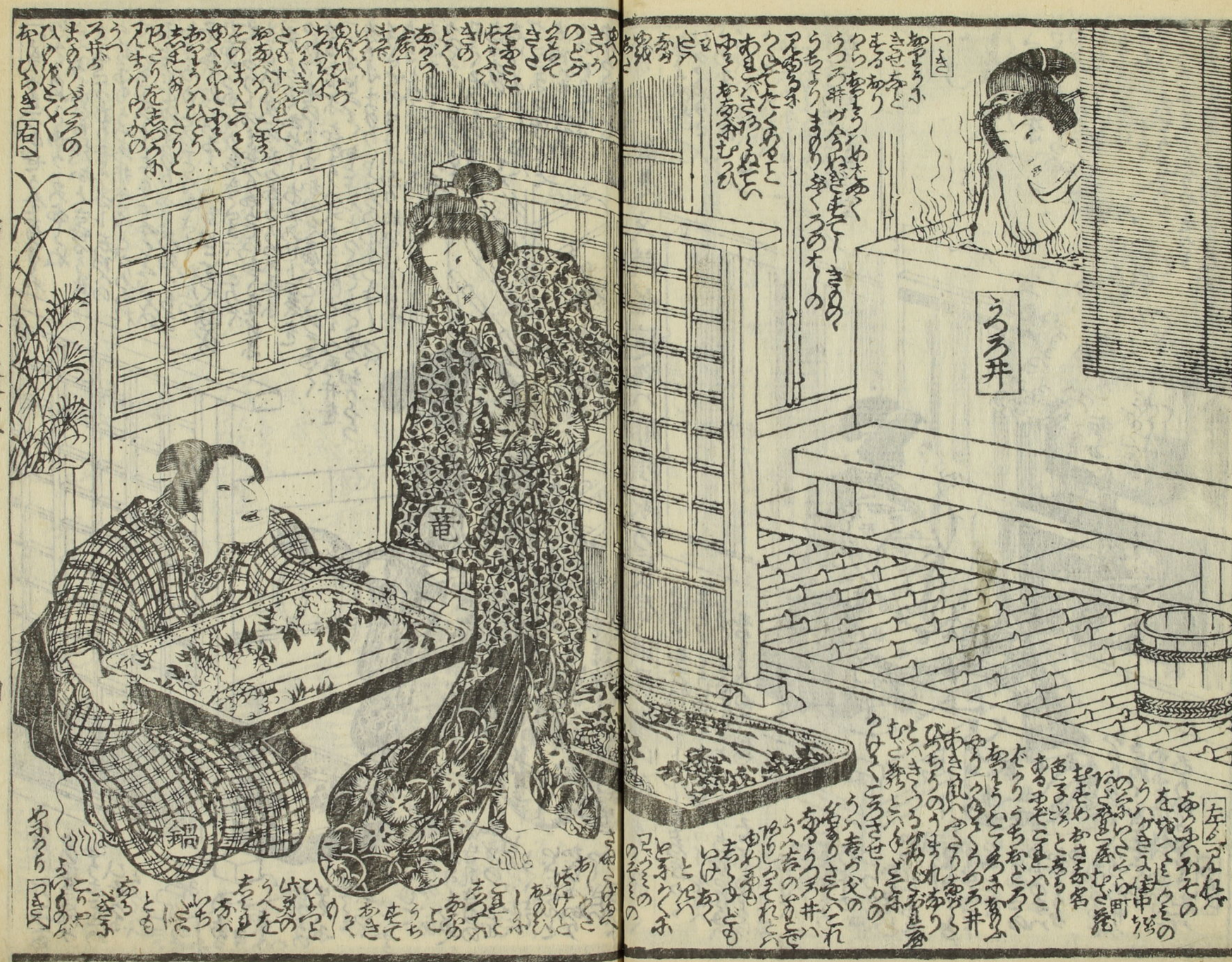
「つぎき」さてさてこれはこれはこれは

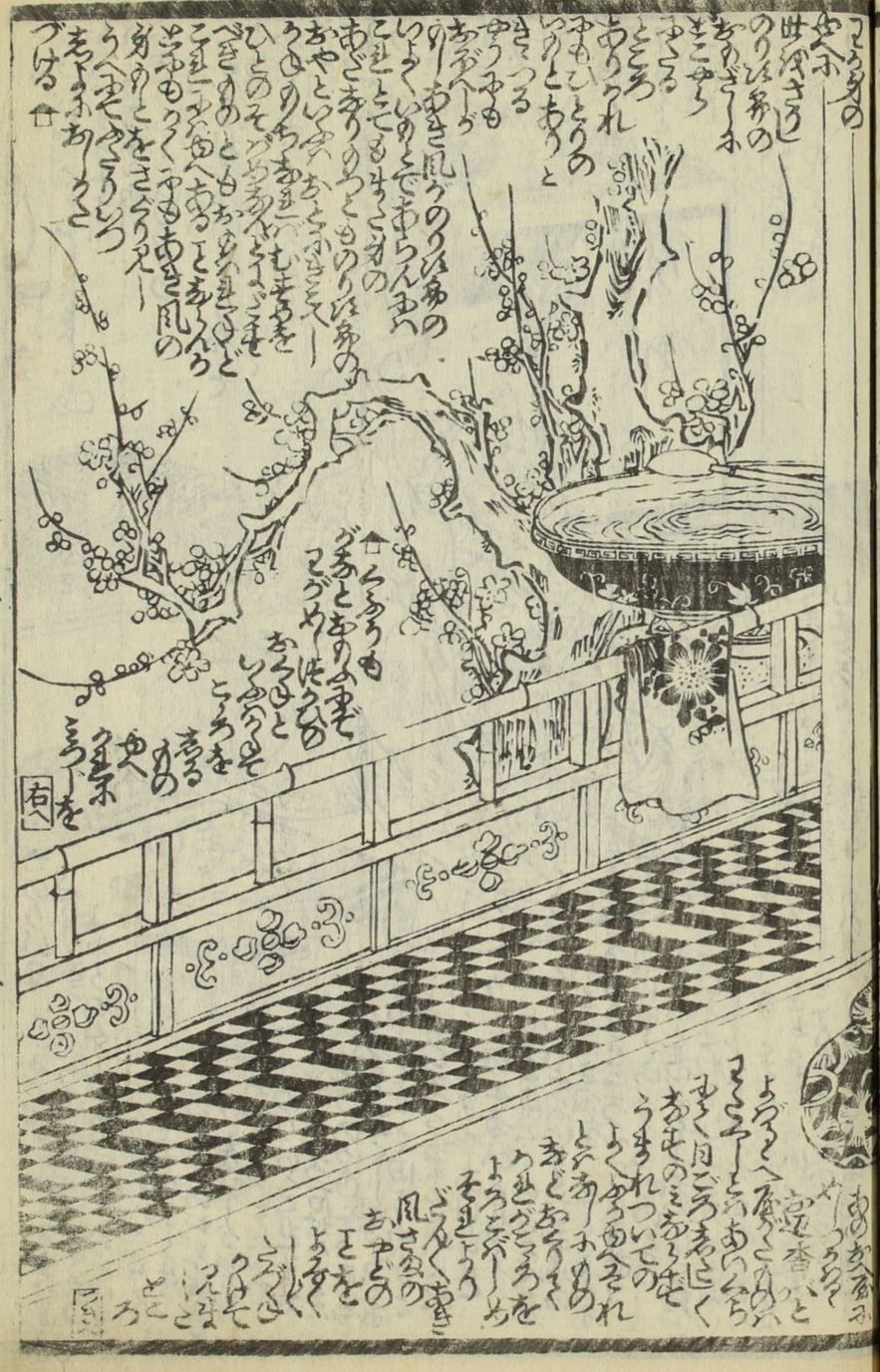
花吹節之介
清明

虚井
婢女
阿鯛



第十一編本文読始這処へ那須家の長局風呂場の躰より説く

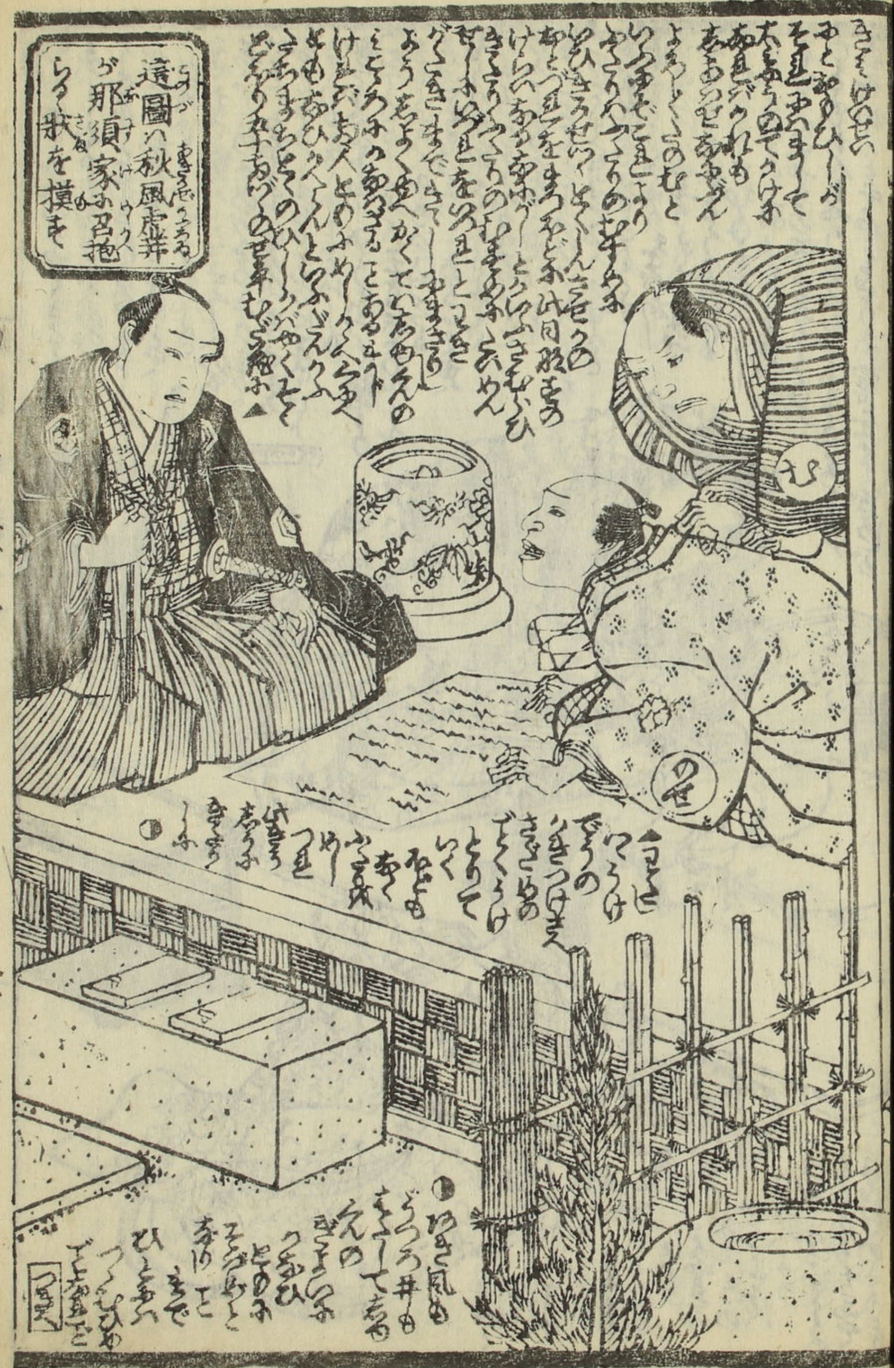

うろう井
竜
鍋



竜

久

虚
秋


遠國ハ秋風吉井が那須家お召抱らく狀を撰き

秋

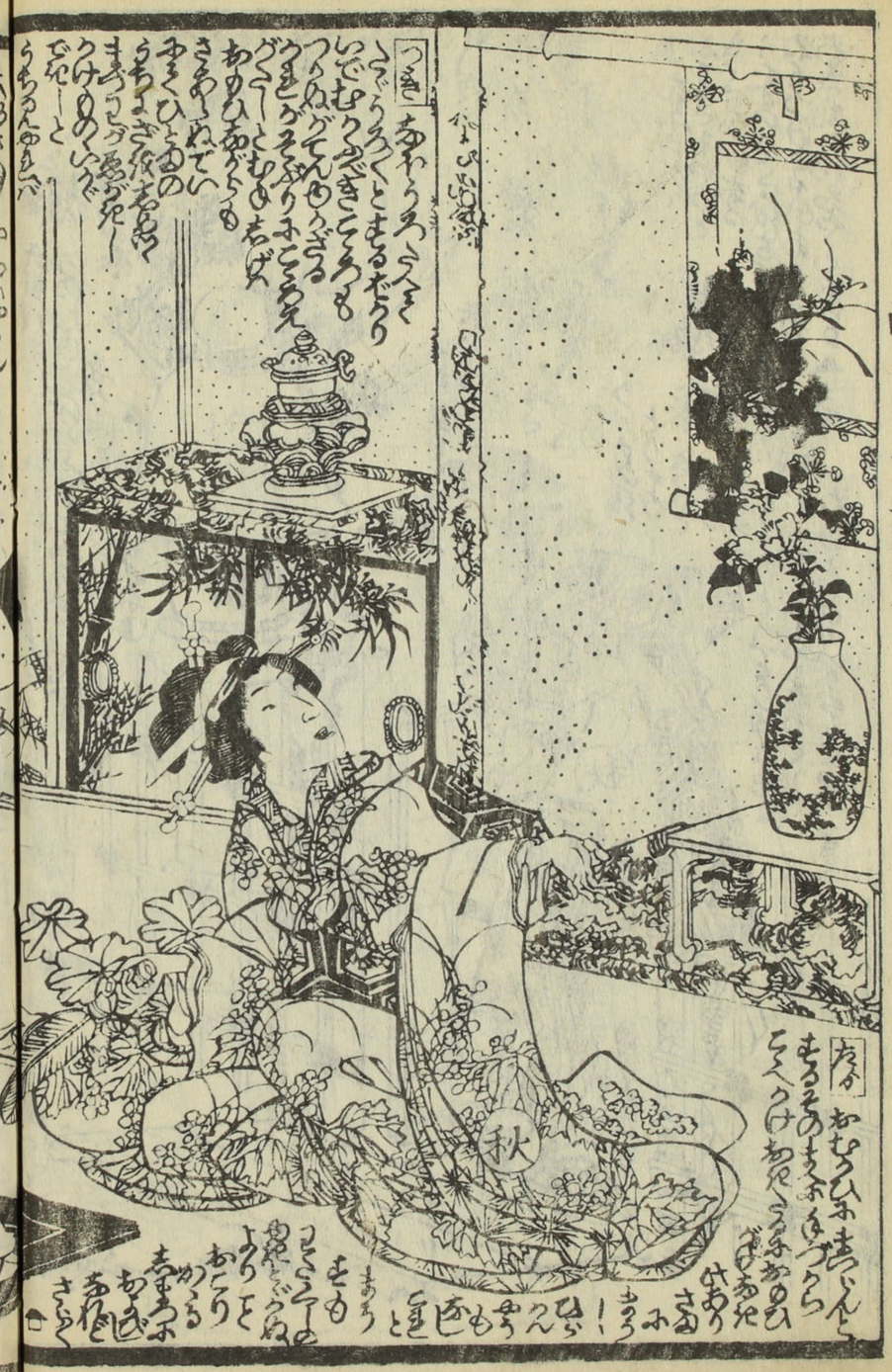
鍋
虚
久

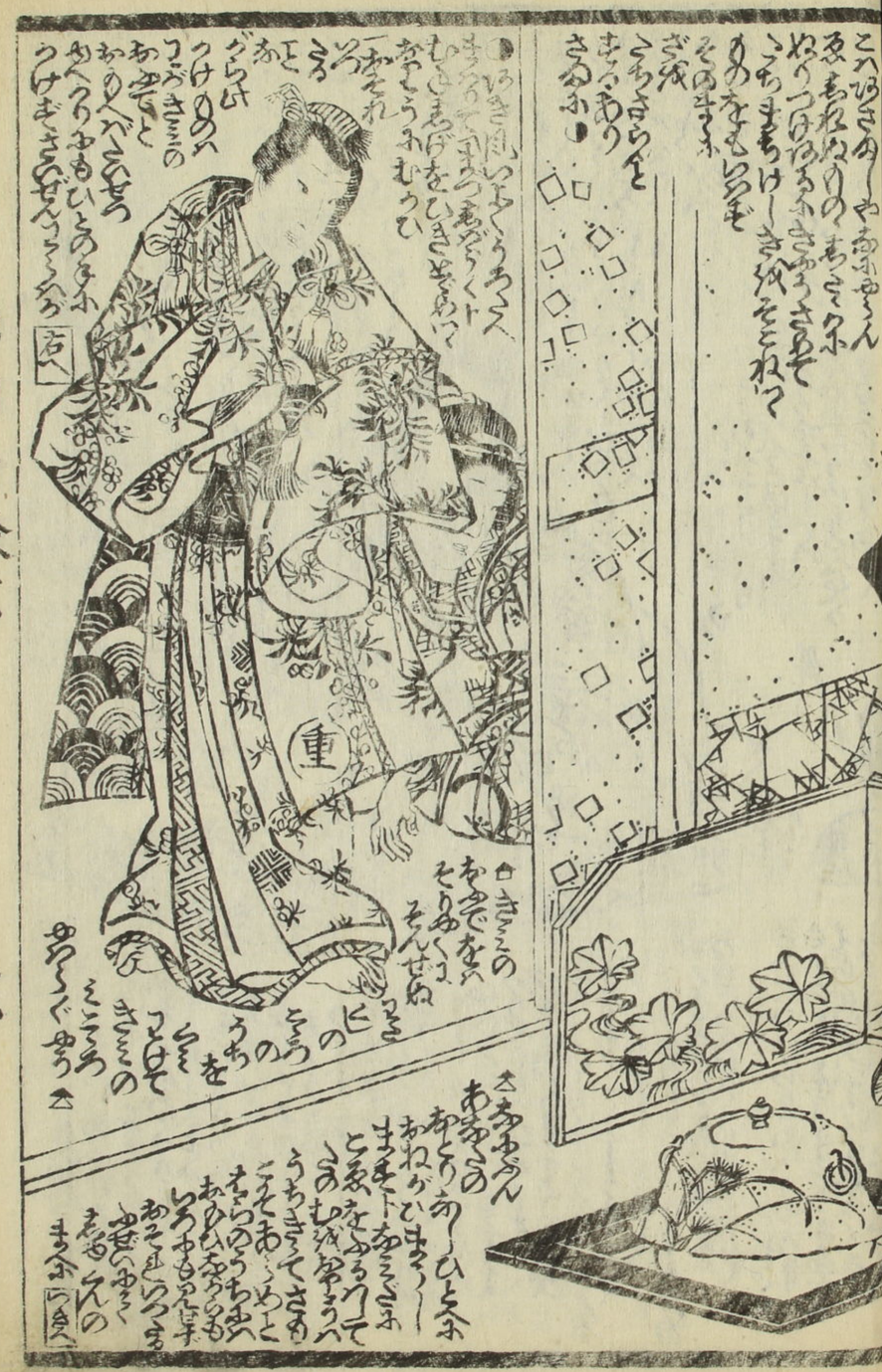
國貞画
春水補綴
虚
鍋

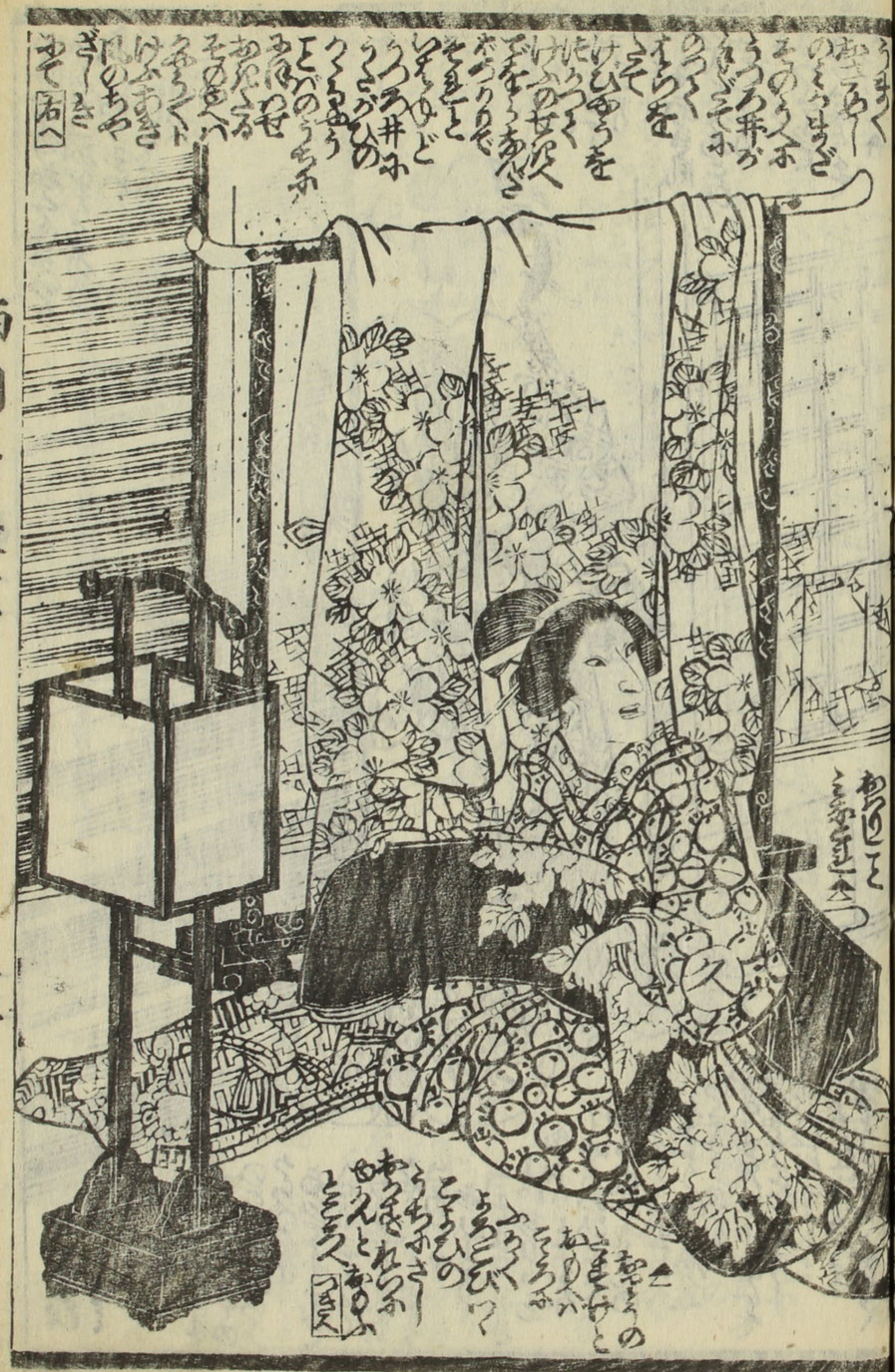
三
秋

つきの
七
東
青

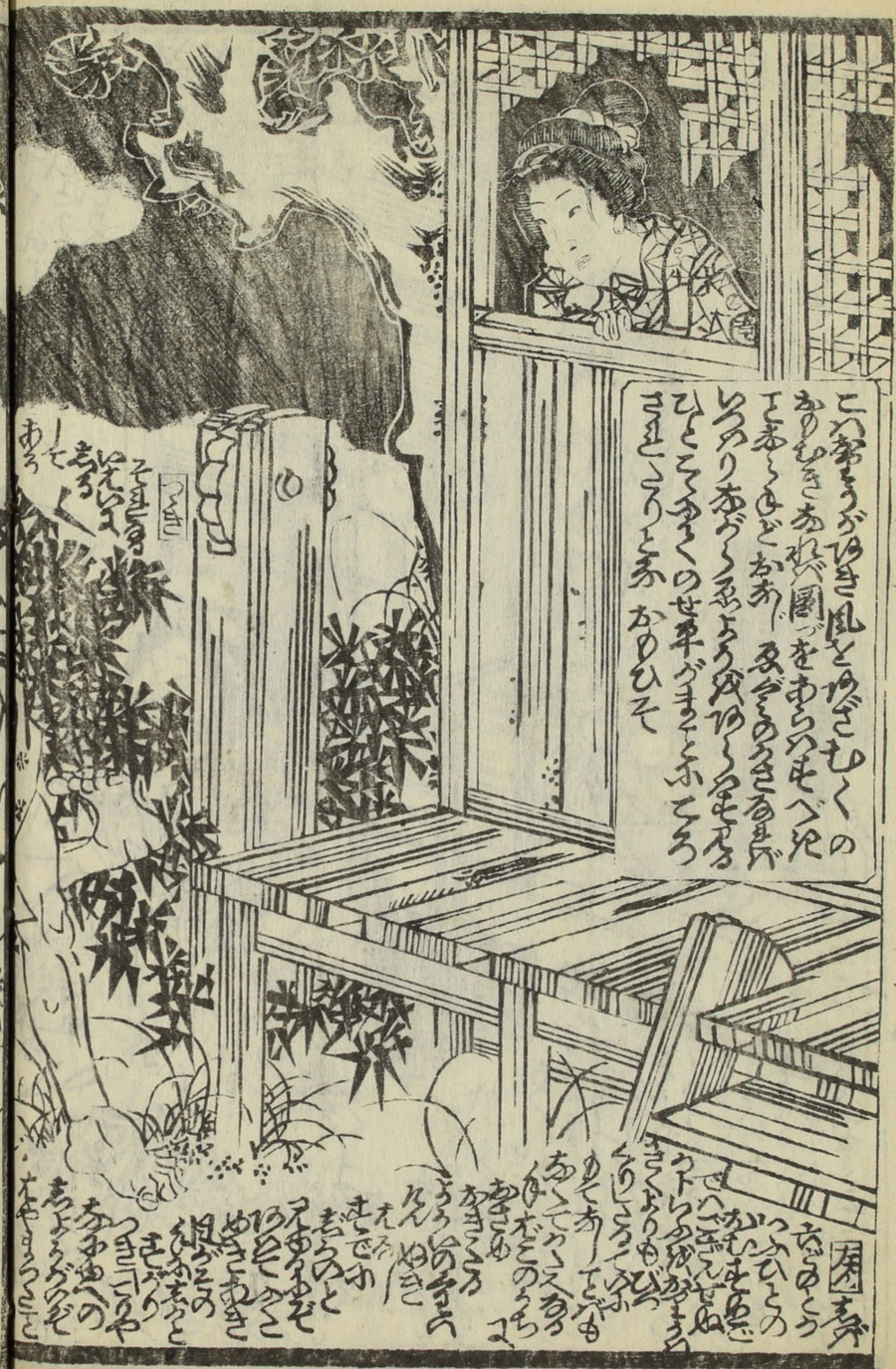
秋


秋


重



秋
竜



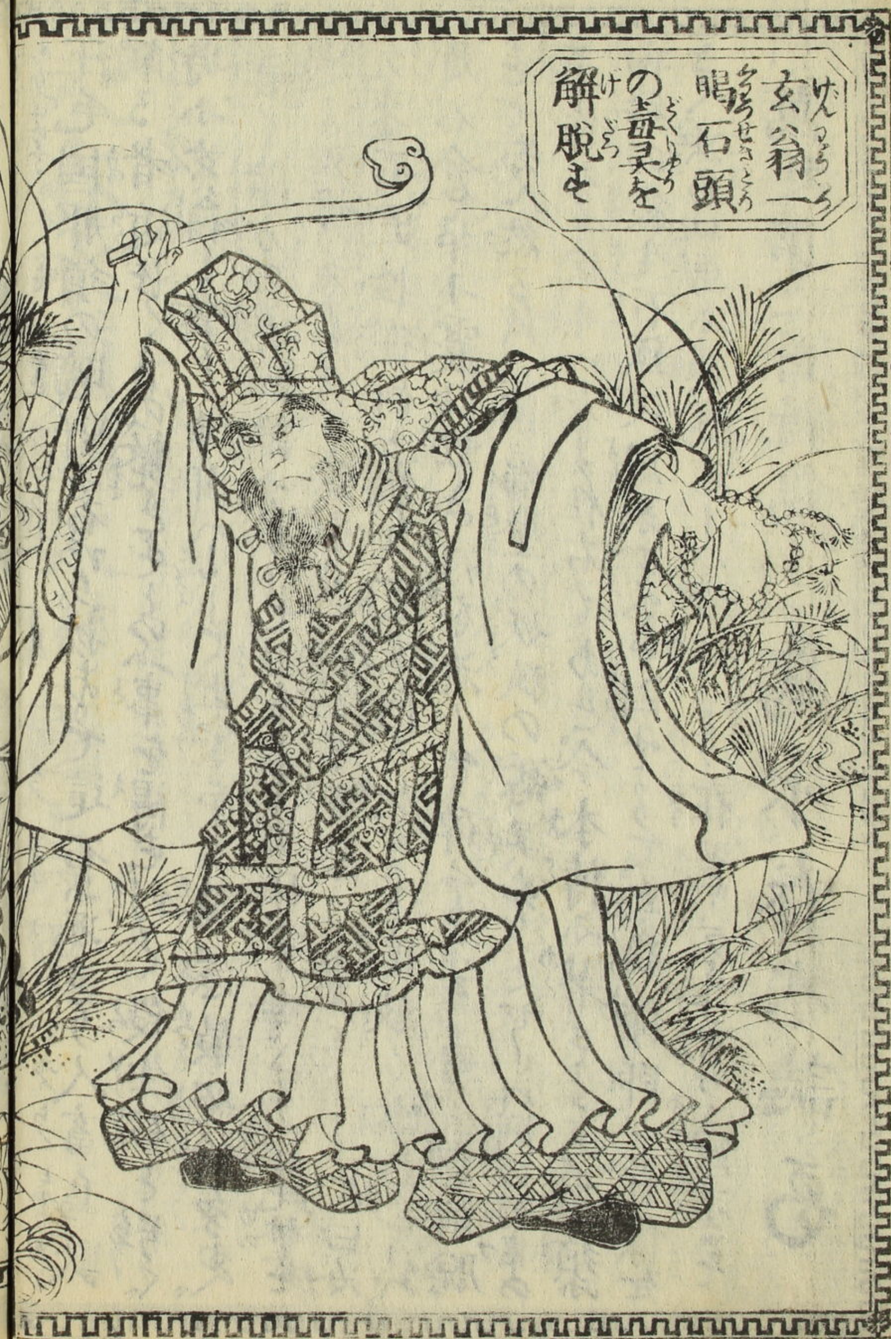
秋
秋
秋
久

爲永春水補綴　歌川國貞画

下毛国那須の曠野ふ石ころ物ありて這石ふ馮まり人畜鳥獸
觸る者近ばくるの斃もとふ事を得ざ仍く殺生石と号く
時ふ玄翁と唱る禪師ハ少して出家ふ一聰慧最絶倫多更
普く諸方の善知識ふ參して法を我山の碩学ふ得ん一日此禁を
過て携えもち如意を以て什の石を敲く壹三下して曰汝
元来石頭性從何ん来り靈從何ん起る ト復敲く事三下されば
那石倉卒ふ震ひ動き汗を流して碎くるふそ毒気忽解脱
もと多ん然る共三国偏歴の妖狐の怨気茅りとせ一へ例の好事の
葦作ふる筆ハ左まれ右もあれ今本傳ふ著さ所ろの那須ふ
由縁の殺生石ハ仮用ふ其べきふ因ふよりて玄翁禪師ふ肖像を
さへ炎の口画ふ摸写ふ一ハ碎條より在舊ふる作者ふ浅学ふそ

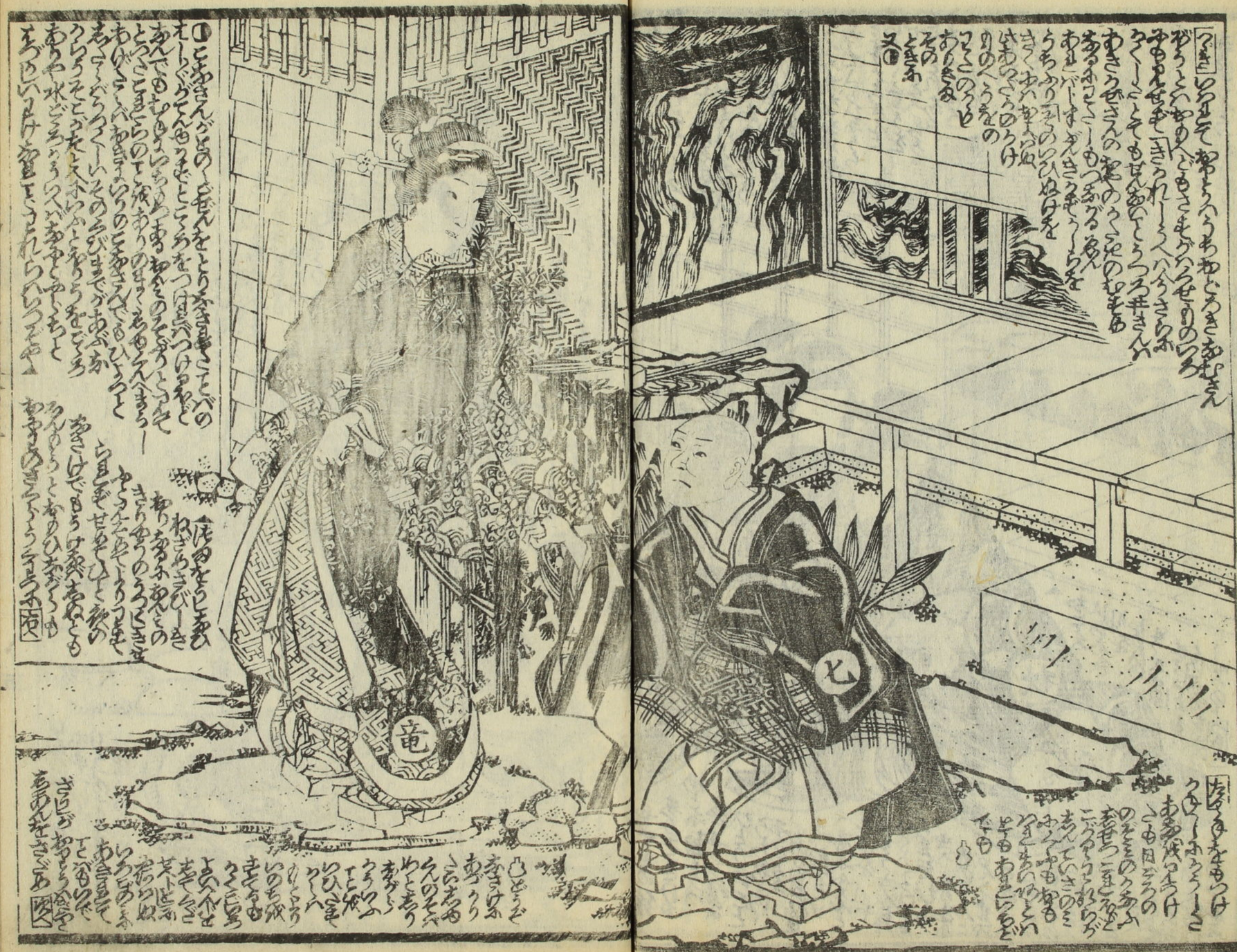
萬延第二酉新鐫　爲永春水誌

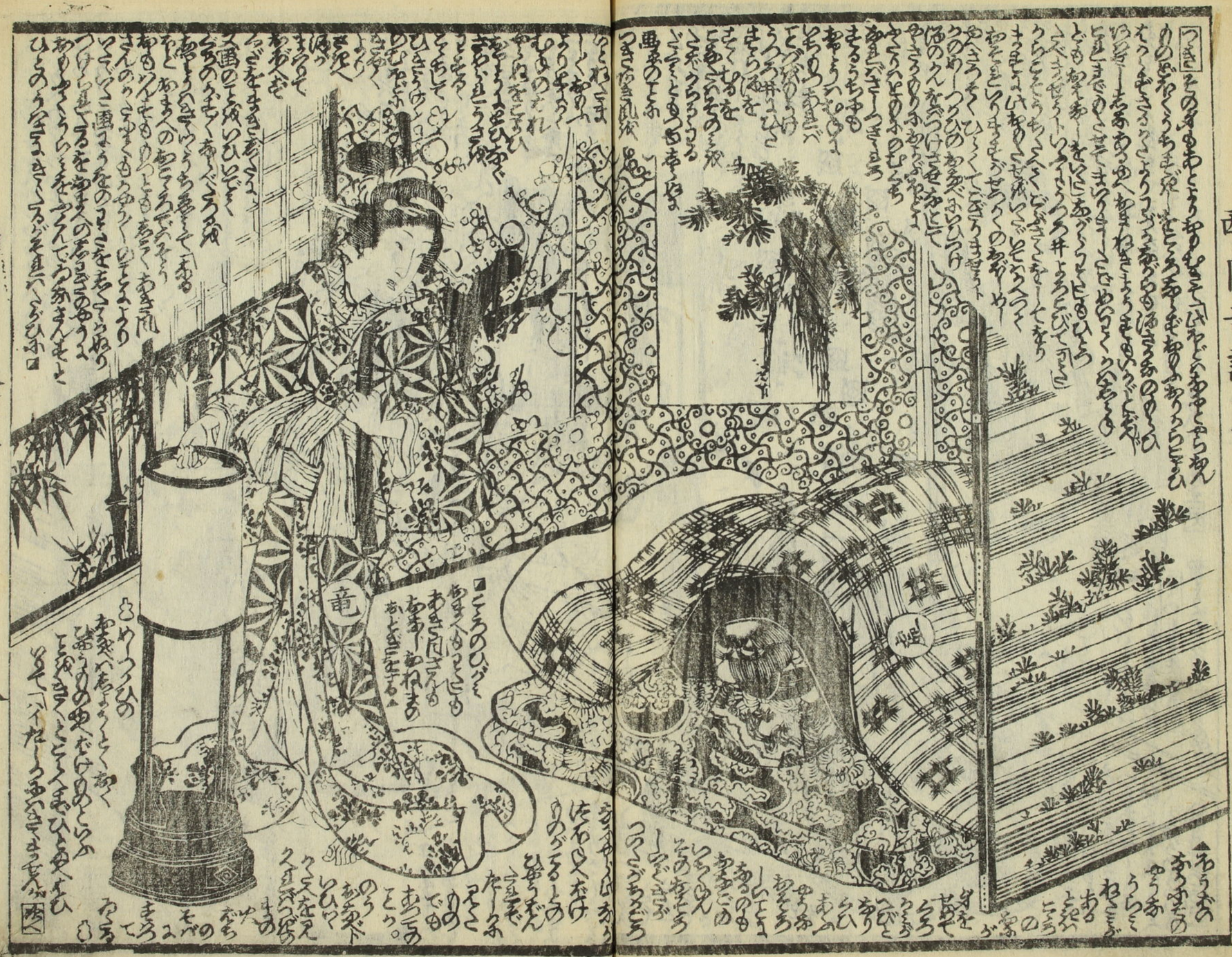
殺生石


玄翁一鳴石頭の毒気を解脱せ

偽龍太郎

二の町御前


七
竜

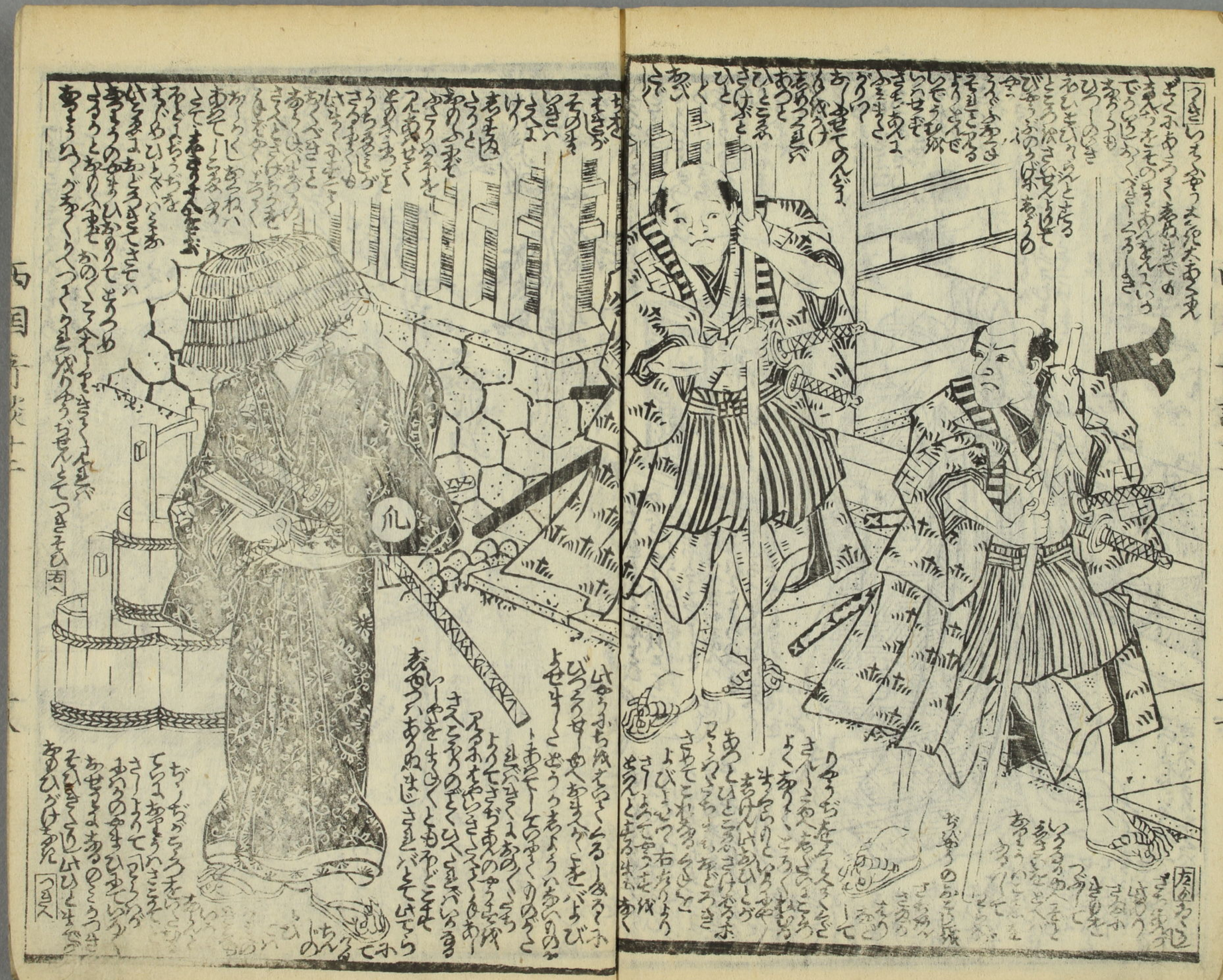


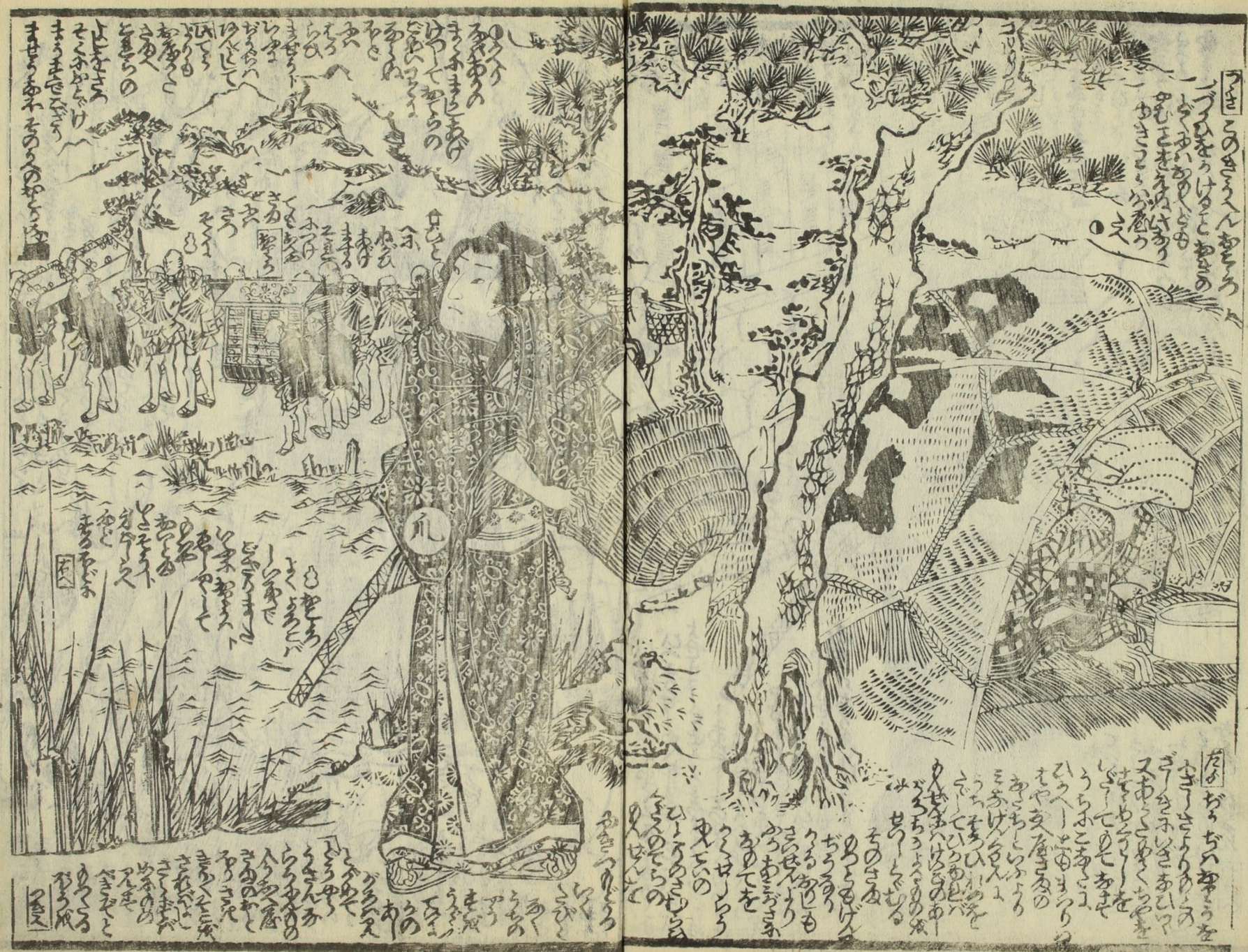
秋
竜

國貞画　春水補綴

竜
七

七
竜
九





朝鮮牛肉丸 大色金三朱 中包金一朱 小色百銅
世間多年其名伝り愛玩比類なき名の某も数年久当私家製造の秘伝を以て毎日のく出来て有り
下長崎見物の土産
對馬屋 深崎氏製

爲永春水補綴 梅蝶樓國貞画

新增補西國奇談

廿編 爲永春水作
廿一編 孟齋芳虎画

薄緑娘白浪 九編 假名垣魯文作
十編 錦朝樓芳虎画

隅田川月と梅若 五編 柳亭種彦作 山々亭有人編次
六編 孟齋芳虎画

繪本太閤記 三編 孟齋芳虎画作

地本問屋 両國廣小路 加賀屋吉兵衛板